

## インド中観派における衆生利益

新作慶明  
(武蔵野大学)

大乘仏教における二大潮流の一つである中観派は、一般に、「すべてのものは空である」と標榜する学派であると解される。その中観派をめぐる従来の研究は、しばしば哲学的な議論に関心が集まり、「衆生利益」などの実践論についての研究は、多くはないのが現状である。本発表では、中観派における「衆生利益」について、主として、チャンドラキールティ作『入中論』(*Madhyamakāvātāra*) / 『入中論釈』(*Madhyamakāvātārabhāṣya*) をとりあげ、利益される側の衆生に焦点をあてて、考察を加えてみたい。近年、チャンドラキールティに関する研究環境の進展は著しく、これまでサンスクリット原典の参照がかなわなかった『入中論』第6章(偈頌部分のみ)、および、『入中論釈』第1章から第5章のサンスクリット語テキストが新たに公刊されるなど、より詳細な議論が可能な状況が整いつつある。先行研究の指摘を整理した上で、『入中論』 / 『入中論釈』のサンスクリット原典を用いて、若干の検討を試みたい。

具体的には、まず、衆生利益との関連で、チャンドラキールティの仏身論および「説法」を取りあげる。中観派では、あらゆる存在の共通性質である法性(=空性、真実(*tattva*))は言葉や認識を超えているとされ、それは、仏身論では法身(\**dharmakāya*)に対応する。では、われわれは、どのようにして「説法」を目の当たりにするであろうか。『入中論』 / 『入中論釈』では、高次の菩薩のみが目の当たりにすることができる受用身(\**sambhogakāya*)、や、声聞・独覚・菩薩および凡夫の対象となる変化身(\**nirmāṇakāya*)などの音声としてであると説かれる。そして、その「説法」の根拠は、仏の〔菩薩時代の〕誓願、および、「人の善」であるという。つまり、衆生の側にも善が要求され、その成熟によって目の当たりにする「説法」が異なるのである。

さて、『入中論』 / 『入中論釈』第1章の冒頭では、よく知られているように、菩薩の因として、悲(*karuṇā*)・不二智(*advaya-jñāna*)・菩提心(*bodhicitta*)が列挙され、とくに、悲についての詳しい解説がなされている。これらは、単に菩薩の因として説かれているのみならず、いかにして凡夫が菩薩の道を歩むのかという課題とも密接な関係がある。「愚者(凡夫)の自覚」を表明するチャンドラキールティが、『入中論』 / 『入中論釈』において、この問題をいかに論じているのかについても見ていきたい。

<キーワード> 『入中論』、仏身論、説法